多 摩 市 立 瓜 生 小 学 校

学 校 だ よ り

平成２９年度　第８号
平成２９年１０月３１日

「思 い」と「思 い や り」

校長　吉 田　正 行

１０月１０日、障がいへの理解と交流を目的として、多摩市福祉交流会「障がい者と共にひとときの和」を実施しました。この取組は、障害のある方々と児童・教職員、保護者、地域の方々が一緒に集う場をつくり、交流を通して障がいに対する理解を深め、共に手を取り合って生きていくことの大切さを学ぶことを目的としています。市内の障がい者団体の協力のもと実行委員会を立ち上げ、その方々を中心として準備を進めてきました。

「ひとときの和」は、市内小学校が輪番制で実施しており、その回数は６０回を超えています。この貴重な機会を活用し、本校ではオリンピック・パラリンピック教育の一環として全校で参加することにしました。内容は理解の部と体験の部の二部構成となっています。理解の部では①体の話「ちょっと手を貸してください」②目の話「見えないってどんなこと？」③耳の話「聞こえないってどんなこと？」についてそれぞれの協会の方々や障害のある方々から話を聞きました。体験の部では各学年に分かれて、点字、手話、車いす、障がいのある方への接し方等について実際に体験をしながら学び、子供たちにとってさまざまな気づきがありました。「困っていそうな人がいたら、勇気を出して声をかけます」「身の回りの点字やバリアフリーの施設を調べてみたい」という児童の感想からも今回の体験が有意義であったことが分かります。

実際に点字を打ち、体験して学ぶ子供たち

さて、皆さんの中にサインペンやマーカーペンを見て「緑」「オレンジ」「紫」「ピンク」など、そのペンの色の名前が書かれていることに気付いた方がいるのではないでしょうか。同じように、デジタル放送に対応したテレビのリモコンには、「青」「赤」「緑」「黄」のボタンに、それぞれの色の名前が書かれています。「見れば分かるのにどうして色の名前が書いてあるの？」と思う人もいるかもしれません。しかし、社会には黄色と黄緑の蛍光ペンはほとんど同じ色に見えるなど一般の方と異なる特性をもっている方もいます。その方たちがメーカーに訴えて、社会が変わってきた一例です。

詩人の宮澤章二さんの「行為の意味」という詩に**『胸の中の思いは見えないけれど思いやりはだれにでも見える』**という一節があります。私たちの社会には、いろいろな人が生活しており、それぞれが楽しく、安全に、充実した生活を送ることが大切です。明日を担う子供たちがそれぞれの違いを認め、相手の立場を理解し、思いやりをもって行動できる人に成長すれば、日本だけでなく世界中が温かく心豊かになると信じています。

芸術の秋。本校では１１月１０日・１１日と学芸会を行います。子供たち一人一人が自信をもってそれぞれの良さを発揮し、キラキラと輝く学芸会を目指して練習に取り組んでいます。多くの方々にご来校いただき、励ましのお言葉をいただければ幸いです。